

温泉の水滑らかにして(3)

岸本文男¹⁾

中国観光保養温泉あれこれ

風景出色の従化温泉

広州は、中国に入国し、あるいは中国から出国する場合の“南大門”である。世界各国からこの地に入った人々は一路観光地を目指し、何処かと言えば大抵は広州の北にある従化温泉公園を訪れる。一ひらの香氣馥郁の花に似て、心洗われるからこそ、この公園ははるばる外国から観光客を惹きつけるのだ、と中国の人は言う。

従化温泉は従化県東部の東北部にあり、そこは南の広州市まで81kmという所である。広く平坦な柏油国道に車を走らせれば、広州から2時間ほどでこの温泉地に着く。車を下りて歩けば、そこはまさに仙境。周囲に緑したたる山々をめぐらし、碧青の流溪河が一条の翡翠の帯となってその間を流れ、温泉区を東西二つに分ける。雅びな、白い橋が玉帯のように流溪河を渡り、河の両岸には荔枝、杏、桃の木が続き、春ともなれば争って花をつけ、その艶を競い、香氣は馥郁と人々を酔わせる。山々は松をいただき、竹に蔽われて、渡る風さえ緑に染まるかのよう。その中にたたずむ玲瓏な建物も万緑に映える。1959年の1月、ここで療養の日を送った朱徳將軍は、この風景に接した感動を一篇の七言絶句に託し

梅花開後桃花開 緑竹青松夾岸排
唯有荔枝園更好 林中噴出暖泉來

と歌った。いかにも軍人といった、まことに卒直・明解な詩である。

従化温泉区は流溪河に沿ってほぼ弓背形を示し、その延長は10余kmに達している。この従化から南西に、広州、開平を経て陽江に到る一条の新カタイジア系断裂帯があって、その両側には温泉が少なくない。従化附近では、その断裂帯が一条の東西方向の断裂と交差し、非常に多くの割れ目ができていて、その割れ目を通路とし



第29図 従化温泉の湖畔に立つ温泉ホテル

た、流溪河の両岸と河のセンターに沿った温泉が10ヶ所湧出し、河の水が暖かいだけでなく、流溪河の両岸に連なる砂洲も温度がかなり高く、それで流溪河も“熱沙溪”と呼ばれている。この河の中にある岩礁からも温泉70℃を越える温泉が湧いていて、従化温泉の中では温泉がもっとも高い泉源となっている。その他の泉源の多くは温泉が59℃前後、最低のものでも30℃以上である。

この地の温泉は単純泉で、無色・無味であるが、ナトリウム、カルシウム、マグネシウムなどの鉱物成分と放射性元素のラドンを含有していて、比較的良い医療作用を備えている。身体の疲労・倦怠、ノイローゼであれば、この温泉の沐浴が血液の循環を促して疲労を取り除き、精神を奮い起こさせ、また皮膚の新陳代謝を促進して免疫力を増進させることもある、と言われ、関節炎、神経痛、皮膚病、婦人病を病む人々のこの温泉の効能への期待は大きく、この従化温泉を“自然の病院”と呼んでいる位である。療養には、沐浴、飲用、砂浴が用いられる。すでに湯場と貯湯塔ができていて、温泉ホテルや療養所の各浴場・治療室に直接温泉水が送られている。それだけでなく、温泉区附近の村落に作られた温泉

1) 元所員：〒152 東京都目黒区東カ丘1-23-21

キーワード：中国，温泉



第30図 雅やかな華清池温泉九龍の湯

浴場に送られ、あるいは洗濯や乾燥に使われ、あるいは湯治に利用されている。

従化温泉は医療と湯治に利用されるだけでなく、すでに紹介したように、優雅・静寂な自然美を誇る観光の地となっているが、この地が人を呼ぶのは気候条件の良さが与って大きい。厳冬の気温が例年8—10℃、盛夏の日中の気温が23—32℃という事実がその気候条件の良さの象徴であろう。これらの条件と環境であればこそ、訪中した国賓や国賓クラスの外国人が案内される温泉といえば従化温泉であり、その国の数はすでに100ヶ国を越えて全国の温泉の中ではダントツになっているのであろう。

歴史を誇る華清池温泉

渭河の谷の南面、陝西省臨潼県の域内に低い一つの山、驪山がある。この山はその背後に連なって高く聳える、延々1,000kmもの秦嶺に較べれば、山勢が雄大ではないが、却って秀麗の賞賛を聞く。その山麓にこんこんと湧き出て、清冽さが人に喜ばれている温泉があり、これは遙か3,000年を遡る昔、すでに名勝の地となっていた。これが世に言う、華清池温泉である。

華清池温泉の歴史は、古都、西安の変遷と深く関わっている。中国史の中で、11の王朝が西安を都にした。遠く周の幽王の時、臨潼城の山を背にして河に臨むという自然環境を利用した、壮麗な邸と庭が造営され、驪宮と呼ばれた。秦の始皇帝が都を咸陽に定めてから後、驪山の温泉も彼の保養の地となった。唐の天宝6年(紀元747年)になって、玄宗は驪宮に手を入れ、規模がさらに広大な華清宮を建て、温泉を引いて華清池を作り、華麗な九龍湯と芙蓉池を設けた。九龍湯は皇帝専用の浴場であ

り、芙蓉池は玄宗が寵愛した楊貴妃の浴場であった。それで、後に芙蓉池は“貴妃池”と呼ばれるようになったのである。毎年、冬になると、玄宗は楊貴妃を連れて華清池に行幸し、歓を尽くして楽しんだ。白居易はその〈長恨歌〉の中で

「驪宮高処入青雲 仙樂風飄処処聞」

と歌っているが、これは当時の驪宮での日々の様子を端的に表した一節である。

華清池はあまた王朝の帝王の行在所であったため、名勝・旧跡がすこぶる多い。とは言っても、歴史の移り変わりにつれて古い建物はすでに多くが失われてしまったが、それでも幾つかの遺跡を尋ねることはできる。この華清池に残る老君廟は唐代華清宮の朝元閣の遺址であり、また海拔913mのところにある烽火台は周の幽王が使ったものと伝えられている。

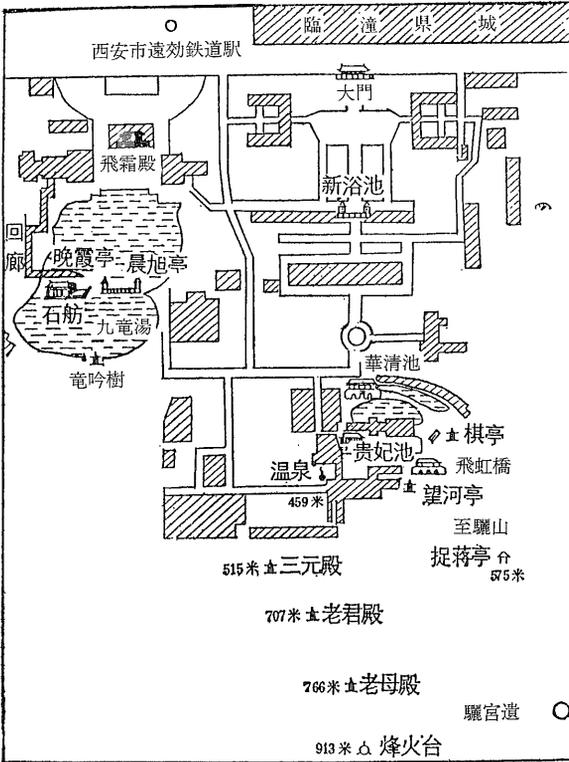
驪山の華清池温泉は、断層から湧出する温泉である。この温泉は新カタイジア系の北北東方向の断層帯と秦嶺の東西性褶曲帯と西北西方向の断層帯が交差するところに湧出し、驪山県の景城南門の門外、驪山の北麓の海拔ほぼ560mの地に位置している。四つの泉口があって、熱水は地下の“高温層”から供給され、泉温は四季の変化に影響を受けず、常に44℃前後(年間の泉温の変化は0.5℃よりも小さい)であり、そのため、恒温浴池とも呼ばれる。泉水は無色透明で、湧出量が多く、毎時112トンと推算されている。

華清池温泉の泉水は鉱物質成分に富み、陽イオンとしてはナトリウムとカリウムがかなり多く、陰イオンとしては塩素イオンと硫酸根が主である。同時に、一定量の放射性ラドンも含有している。入浴すれば、気分が爽快になるだけでなく、皮膚病にも胃腸病にも効く。

中華人民共和国になって華清池の西に温泉療養所が建てられてから、華清池の区域内は多くの広々として明るい、新しい、国民の大浴場に姿を変えた。“貴妃池”と“九龍湯”“海棠湯”などの池、日本であれば、さしづめ“楊貴妃の池”“竜神の湯”“海棠の湯”と言った大浴場がそれぞれに古代の様式を取入れた当時もかくやの姿に修復され、古代建築の中で好まれた色、好まれた外観をそのままに池という池がすべて白磁のタイルで改造され、目に入るのは狭く映える白そして白、泉水はもって一層の透明さを加え、湯につかる人は誰もがその興味にうっとりとする、と言う。

華清池は、あるいは清澄な泉水があり、あるいは豊麗な風景があり、あるいは歴史に迎える名所と旧跡がある一つの優美・華麗な、まさしく公園となった。

訪ねれば、迎えるのは華清池の立ち並ぶ赤い柱、連綿



第31図 華清池温泉の温泉・施設の配置平面図

と続く回廊の群れ、一段と高い構えの“飛霜殿”……。背後では九龍の池が風に波立ち、そこに薨をいただく“九龍湯”と“海棠湯”が人を待っている。その石堤を下りると、白玉に彫刻の龍頭が9体、それぞれに頭を池に伸し、生きているかのよう……。李志華の筆は、さらに続く。

楊貴妃にまつわっての有名もさりながら、華清池のその名がとくに世界に轟いたのは、世に言う“西安事件”の舞台となった時である。この事件は、1936年に起った。それに先立つ1931年（昭和6年）9月、日本関東軍は当時の満州軍閥の頭領、張作霖を特別列車もろとも柳条湖の鉄橋で爆殺し、それを発端として日本はいわゆる満州事変という名の中国侵略を開始した（時の陸軍大臣は南次郎）。張作霖の長男、張学良は、父親を爆殺したのが日本軍部のというような反張作霖の中国北京政府の手先でなく、関東軍それ自体であること、日本の政府と軍部が旧満州全域だけでなく、中国全域の占領をうかがっていることを見抜き、国を挙げて中国の防衛に立ち上がらせるために、まず蔣介石に手紙を送って“連共抗日”（共産党と連合して日本の攻撃に抵抗する）を説いた。同じく地方軍の指令官である楊虎城も張学良の主張に共鳴して蔣介石の説得に努めたが、蔣介石は陝西省の延安を中心に解放

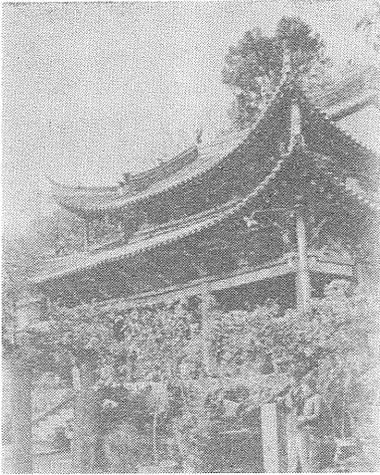
区を作って抗日を呼びかけていた朱徳と毛沢東の率いる軍隊、人民解放軍への攻撃に全力を傾け、張・楊両将軍の意見に耳を貸さなかった。そこで意を決した張学良と楊虎城はそれぞれの軍を率いて蔣介石に迫り、力づくで翻意させる決心を固め、12月12日夜、蔣介石が泊っていた華清池温泉を包囲し、激烈な戦闘ののち、山に逃れようとしていた蔣介石を発見して捕えた。驪山の半腰にある“捉蔣亭”は、その時、蔣介石が捕えられたところに建っている。言うなれば“西安事件”の記念建築である。この事件が中国の抗日民族統一戦線の誕生の契機になり、国の滅亡を防ぎ、ひいては中華人民共和国建国への道につながっただけに、中国にとっては建てないわけにいかない歴史的な建物なのであろう。この捉蔣亭の背後の岩の間に、一人一人がやっと通れる裂け目が、そしてその上に小さな洞がある。この洞が蔣介石の、追手を逃れようと身をひそめた、そして見つかって逮捕された、記念すべき現場なのである。今では、鉄の鎖を伝ってその洞が覗けるようになっている。

後日談を語れば、この事件は次のように展開したのである。

捕えられてもなお、解放軍の撃滅を主張して抗日を承知しない蔣介石に怒った両将軍は彼の処刑を決意し、その旨を内外に伝えた。いち早く事件の発生を知った中国共産党の指導者たちは、日本の攻撃が広がる中では何をさておいても日本軍を追払うことが先で、蔣介石を殺すよりも抗日に立ち上がらせるために手段は尽くされるべきであるとの結論から、周恩来を西安に派遣して張・楊両将軍を説得させた。かくして、蔣介石の命は救われ、協力して日本の侵略に当たるための中国国民党と中国共産党の協定が成立した。いわゆる、国共合作である。それから後、日本軍は終りのない泥沼戦争に入って行き、日本の国民は、「他民族を侵略する民族は自由ではあり得ない」、という事実をいやというほど味わい、その事実苦しむことになったのである。

“捉蔣亭”を少し行くと、老君殿、老母殿、烽火台など、それぞれ有名な旧跡がある。烽火台に登ると、見はるかす茫々800kmの秦川の上流、緑の野を流れて渭河が形どる一条の玉帯、直下を見下ろすと驪山は森に沈んでいる。その東面に始皇帝の陵を取巻くザクロの林が始まり、陵から遠くないところにある一つの大～きな、背の高～い建物が秦の始皇帝の兵馬俑の博物館である。

日本でその兵馬俑の一部が展示され、一人一人の表情の違い、その形の豊かさに感動さえ憶えたものであるが、何を思っかその一体を壊した恥さらしな輩がいたいや～な記憶がある。あれは、おかげで日本全体が世界の軽蔑を受け、信用を落とし、日本人の本質が文化に縁



第32図 安寧温泉近くの曹溪寺

のない野蛮と見られた事件だった。今もって、日中友好の記念物にペンキを塗るといった、日本人の面汚しが現れる。世界の新聞に「野蛮な日本人」の烙印まで押されて。

驪山の兵馬俑博物館は、今日も人々に歴史と文化の何たるかを教え、民族の誇りを強めるだろう。それは文化遺産の尊重の精神を育て、破壊が獣に劣る行為であることを教えるだろう。そうあって欲しい、と思う。もちろん、日本でもだ。宅地造成で古墳が削り取られる国、国宝が放火で焼失する国、歴史的建築物が地価高騰で消え失せる国、日本であれば、とくに。

1955年の5月、この地に遊んだ中国科学院院長、郭沫若は華清池に見る歴史の滄桑の変に感を寄せ、次のように詩っている。

驪山雲樹郁蒼蒼，歷尽周秦与漢唐。
一脈温湯流日夜，幾抔荒塚掩皇王。
已駭碩鼠歌麟鳳，定復台澎系犬羊。
捉蔣亭前新有咏，游春士女樂而康。

(驪山の雲樹 郁りて蒼蒼、
歴り尽せり 周・秦と漢・唐。
一脈の温湯 流れて日夜、
幾抔の荒れ塚 皇王を掩う。
已に碩鼠を駆りて麟鳳を歌い、
定復台に澎ありて犬羊を系ぐ。
捉蔣亭を前に新た咏ずる有り、
春に遊ぶ士女 楽しみて康やかなり。)

螻螂川河畔の碧玉泉

四季がすべて春のような昆明市の西南40km余の螻螂

1990年3月号

川の畔、安寧県城の北に、中国でもっとも有名な温泉療養地の一つであり、景勝の地の一つである碧玉泉がある。

碧玉泉は、またの名を安寧温泉と言う。温泉は崖の穴から湧出し、その水底に小石が敷き詰められ、湧出する熱水の波立ちに映えて、小石が碧玉のように見えることから碧玉泉の名がある。この温泉は幾つかの山をめぐるして風光に恵まれ、東辺は低く可愛い鳳山、西辺は龍が戯れる姿に似た龍山、その間を玉帯のように螻螂川がたおやかに流れている。昔の人はこの優雅な景色を愛で

「門前熱水和冷水，屋北龍山接鳳山」
(門前に熱水また冷水，屋北の龍山
は鳳山に接す)

という一節を残している。

この地は石灰岩が分布する地域で、カルスト地形が発達している。山腹・山麓に大小さまざまな鍾乳洞が密集し、奇石・怪石が林立する。山上の松、檜、ユーカリなどの古木が天まで届けとばかりに鬱蒼と生い茂り、林間には草花が群がり、妍を競っている。萌える緑の中に堂々とした明るい別荘が見え隠れし、のどけさがさらに心を安んじてくれる。加えて、この地は昆明の町と同じように四季すべてが春、その気候は人に優しい。1年12ヶ月、樹は緑で花は紅、温泉の水は澄み、空気は美味、誰もが爽快さを讃えるという。こんなところが“碧玉泉”と呼ばれる所以なのであろう。

螻螂川の峡谷に、一軒のとくに美しく装った温泉ホテルが建っている。見下ろせば、まるで精巧な箱庭を見るような美しさと例えられ、とくにその庭園は配置の巧みさで名がある。その正面に向かって左側の角に廊下があってほぼ半円形の透明な“鏡のような”と例えられる、白磁のタイル張りの温泉池に続き、熱水は池底の岩石の割れ目から湧出し、そのまま湯の花とともに流れて常に澄み、無数の気泡が千変万化して興を添え、池中から湧き立つ蒸気は或いは薄衣のごとく、或いは細霧のごとく昇っては風の間に間に消えていく。池の端に大きな石があって、そこに力強い五つの文字—“天下第一湯”が黒地に金で躍り、池にその逆字を映している。

話によると、1524年に明代の科挙の最高点合格者、楊升庵が旅の途中でこの地に立寄り、碧玉の温泉を見て感激し、次の一首を詠んだ。題して“温泉詩”という。

「泉水澄清，天然石凹，浮垢自去，
不積污垢，温涼適宜，可以沏茶，
可以烹飪。」

(泉水は澄みて清く，天然に石凹ぼみ，
浮垢自ずと去りて，污垢を積まず，



第33図 重慶北温泉の温泉プールの一角

温涼にして適宜なれば、
以て茶を沏る可く、
以て鮓を煮く可し。)

楊升庵が見たのは、天下に並ぶものがない、素晴らしい温泉だったのである。そして彼が筆を揮った五つの文字それが先に述べた“天下第一湯”だという。それ以来、この温泉の名が天下に知られるようになったとのことであるから、楊升庵の功績は日本の熱海温泉における尾崎紅葉に匹敵する。

この安寧温泉には泉源が多く、その中でもっとも有名な泉源、これが“天下第一湯”である。そのほか、この温泉の村の入口にさしかかる所に石を穿った四角な水槽があり、そこから尽きることなく湯があふれ、村人や通りがかりの人々が自由に使っている。この里の熱水は地下深部に由来するため、泉温が季節に関わりなく、多くは42-45℃で、体温よりも少し高く、無色・無味、透明度が高く、湧出量が多く、例えば“天下第一湯”の場合は一昼夜に1,700tである。含有成分は重炭酸カルシウムが主で、それに次ぐのがマグネシウムとナトリウムであり、少量の放射性元素も含まれ、炭酸泉に属する。

この温泉の医療効果について、中国では次のように言われている。

「温泉は飲んでよく、浴してよく、飲めば食欲を増し胃腸病によく効く。浴すれば血の循環を促し、皮膚・筋肉の痺れを和らげ、疲労を取り、慢性関節炎・腰痛に効果があり、禿には洗髪が効果的である。」

今では、温泉の周りにたくさんの保養所、療養所があり、山寄りに上述の温泉ホテルが建ち、このホテルには“天下第一湯”の温泉池のほかに大小数十の浴室がある。

その温泉ホテルの西側、龍山の麓の森の中に一つの古

寺がある。曹溪寺といい、元代の創建と伝えられ、明代の末に大改修が行われ、さらにその雄大さを増したと言われている。その寺の中に一つの碑があって“虫二”の二つの文字が刻んである。これは“風月無辺”の意味で、明代の末期に時の崇禎皇帝が揮毫したものである。本堂には3体の仏像が安置され、その本堂の前檣に丸い孔が開いていて、仏像と正対している。60年ごとの中秋節の夜になると、月の光がこの孔から差込んで仏像の額を照し、その額が金色に輝くと言伝えられ、この古寺に一層の神秘の色合いを添えている。さらに本殿の前に一本の藤の木と一本の老梅の古木があって、毎年1月になると老梅が咲きこぼれ、その香に人みな酔うという。

嘉陵江河畔の北温泉

有名な坂の都会、中国で“山城”と愛称される重慶市の北面に、一瀉千里の嘉陵江が華蓋山脈の九峰山、縉雲山、中梁山を西北から東南に切刻して雄大・壮麗な嘉陵江小三峡の峻険な地形を形作っている。もっとも北側の滙鼻峡は小三峡の中ではもっとも長く、南側のものがもっとも切り立った観音峡、中間のものが温塘峡、またの名が二岩峡で、温泉が多いので温塘峡と呼ばれているのである。

この温塘峡だけでなく、重慶市の四周に大小10余ヶ所の温泉が散在し、東・西・南・北の4大温泉区を作っている。その中では、南温泉と北温泉がもっとも有名である。北温泉が上述の温塘峡の温泉で、景色の美しさに交通の便も手伝って“川東明珠”(東四川の珠玉)とも呼ばれている。

その温塘峡の西岸に長さ350m、最大幅150mの半円形の段丘状浸食台地があって、その上面の崖に三つの泉源が存在し、温泉は割れ目から湧出している。泉水は清澄で、カルシウム、マグネシウム、ナトリウム、カリウムに富み、硫酸塩-カルシウム質泉に属する。泉温は32-35℃で、沐浴に適している。

はるか北宋の時代、この地に温泉寺が建てられ、温泉が作る奇勝が借景されていたが、山崩れで多くの廟宇が破壊されてしまった。その後、明・清の時代に関徑殿、接引殿、大仏殿が、さらに1863年に観音殿が再建された。観魚池、乳花洞、落差16mの飛泉瀑などの名勝も完全な姿を留めている。そして1927年には名勝観光地に指定され、それから北温泉公園と呼ばれ、さらに北泉公園と略称されるようになった。

その後、1938年に始まった日本航空隊の重慶と周辺地域の爆撃による破壊を免れて、北泉公園は緑の懸崖を背に、臨峽江の碧水に正対し、4大伽藍を中心にして四周



第34図 福州の名勝、白塔と鳥塔

に古香園、石刻、鯢魚池、荷花池を配し、山道の両側に紅梅、白梅、芙蓉、檜、松など色とりどりの花草・樹木を添え、今も一幅の絵巻物になるという。その中の大仏殿は高さが20m、緑の瓦、朱塗の柱、合せて煌輝・壮観と表されている。この伽藍に正対する崖壁の下に長さ50m、幅20mの温泉プールがあり、厳冬期にも水温は24℃を越える。今、北温泉公園の緑深いところに温泉療養所が建っていて、人々の休養と療養に使われている。

北温泉公園の背後には縉雲山の奇峰が屹立・重畳して人の目を奪い、四川省東部の避暑地であり、観光地となっている。縉雲山に登れば、北温泉から約8km、海拔1,080mの縉雲寺に着く。さらに道は松杉に囲まれた紹隆寺を経て、紺碧の水を湛えた黛湖に到る。この黛湖は“青山に象嵌された鏡”と例えられるほど美しく、神秘的である。

縉雲山の峰々は東北から西南に、朝陽峰・香炉峰・獅子峰・聚雲峰・猿嘯峰・蓮花峰・宝塔峰・玉尖峰・夕陽峰と並び、縉雲山九峰を形作っている。黄炎培はこの九峰に一詩を捧げ、その姿・形を次のように詩った。

獅子摩霄漢，香炉篆太空。
朝陽迎旭日，猿嘯亂松風。
夕陽三千界，蓮花七竅通。
玉尖如宝塔，更有聚雲峰。

この九峰の中では玉尖峰がもっとも高く、断崖絶壁は人を寄せつけず、獅子峰がもっとも姿・形にすぐれ、観光客が喜んで登る峰である。晴れた日にその頂に立てば、はるか小三峡までも一望することができる。すでに1,500年の歴史を迎った縉雲寺は、獅子峰と聚雲峰の直下にあり、周囲ごとごとく緑、その樹齢は数100年を数える。その伽藍の前に梅花園あり、茶花園あり、艶を競う日本の桜あり、さらに八角池・海螺洞あり、これらが

縉雲寺詣出に人を誘う。そして真夏の気温は重慶市よりも6℃低く、“火炉”とも呼ばれる重慶市の猛暑を逃れる格好の避暑地である。

秀麗の温泉城

中国の東南沿岸、閩江の下流に歴史の長い古城-福州市がある。その四周は海拔500m以上の翠の山々に抱かれ、閩江が市区を横断している。その市区の五一路の東側に幅1km、延長5kmに達する南北方向の温泉帯がある。それは、北が恩幾亭に始まり、南が王庄に到り、西が五一路に始まり、東が六一路に到る範囲で、面積は5km²、福州市の総面積の七分の一に相当する。この地の温泉の浴池は一つまた一つとごく接近して並び、このような浴池が続く姿は他の大都市内ではまず見られないもので、温泉城と呼ばれるのも当然とされる所以である。

福州市内の各温泉の泉温は一般に50-80℃の間であるが、最高の泉温は97℃である。この泉温の高低は主として地下の熱水賦存深度の影響で、測定資料によると、埋蔵深度が40-65mの間の熱水は45-60℃であり、湧出量は比較的少なく、1井当り約900t/日である。さらに埋蔵深度が浅いほど、水位と泉温が季節の変化に直接影響を受けている。その場合の水位の変化幅は大体1-2m、泉温の変化幅は約5-6℃である。また、深層の地下熱水の埋蔵深度は200-300m前後であり、主として南区と北区に分布し、その温度は90℃を越え、湧出量は多く、水位と泉温は一般に季節の影響を受けていない。

福州温泉は歴史が古く、五代時代にはすでに発見されていた、と伝えられている。そして三山座浴池内には、次のような詩碑もある。

「五代留古迹，三山負盛名，
保健促工作，八閩皆贊稱」

三山座浴池は、この地でもっとも早く開かれた温泉と考えられている。その泉源は石泉寺にあって、熱水が三股に分れて流出し、熱気がひどく、泉温が65℃に達し、泉水は透明、池の底に小さな銀のピンが落ちてても、それがよく見えるほどである。

この温泉帯には多くの温泉浴場が作られ、その設備は非常によく整えられ、国営浴場以外に多数の機関、工場、学校、病院、軍、農業組合がそれぞれの浴場施設を持っている。温泉は塩化物-硫酸ナトリウム泉で、塩素、硫黄、ナトリウムのほか、弗素、ニッケル、モリブデン、チタン、マンガンなど多くの微量元素を含有し、皮膚病、リウマチ性関節炎、感冒、初期動脈硬化、ノイローゼ、血液循環障害などに或る程度治療効果があ

る。ただし、弗素を含んでいるので、齒の珪瑯質を傷めるから飲用には適していない。そのほか、福州市皮革工場では温泉を直接製革に使用し、福州1号地熱井では深度505mから107℃の蒸気-熱水が得られ、地熱発電の準備が進行中である（すでに実験発電所の運転が始まっているかもしれない）。さらに、住民たちは洗濯、料理（鶏・鴨の羽毛取り、煮物など）、温泉栽培などに使い、便利さを満喫している。

温泉は福州市の一大名勝になっているとは必ずしも言えないが、人々の健康の維持や回復に役立ち、仕事や日常生活を楽にしてくれる大切な存在となっている。そして、温泉と結びついた秀麗な、のどかな環境がますます多くの人々の足をこの温泉城に向かせているようである。

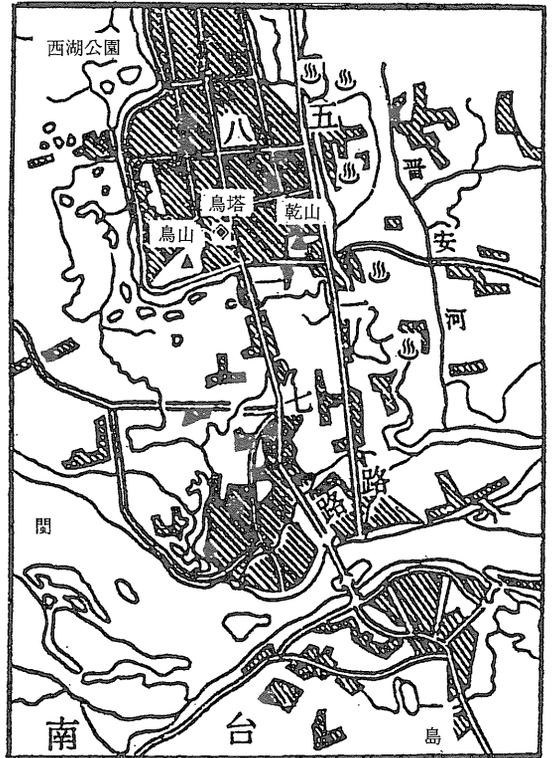
福州市は、山と河が対となって映える町である。市区の南側には閩江の奔流が流れ、兩岸には竹と松の緑と青が続き、城内の“三山鼎峙”“兩塔聳立”はとくに福州の人の誰もが口にする名勝である。

“三山鼎峙”の“三山”とは城北の屏山、東南の于山、西南隅の烏石山を指し、“鼎峙”とは鼎の脚のように三脚で対峙する様子を言うのである。屏山の形は屏風の如く、山頂に一屋が建ち、これを鎮海楼と言う。于山の西麓には白塔寺の伽藍があり、近代思想家であり文学者であった嚴復が読書に打込んだ所である。この伽藍の近くには摩崖仏が多く、113体を数える。于山の西側が烏石山で、その東北麓に黒い石塔があって、その俗称が烏塔と言う。この烏塔は白塔と東西に並び、黒白二本の柱が並び立つという姿、これが“兩塔聳立”である。

福州城外の臥龍山の下に風光名媚と讃えられている西湖がある。この湖は、唐の末期にすでに観光地になっていた。そして1914年、正式に公園に指定された。湖畔に柳の並木が切れ目なく、緑に萌えて回廊のように湖を廻る。一段と高い玉蘭樹の木の間に清楚な西湖ホテルが見え隠れし、初夏ともなれば玉蘭の花盛り、その香が馥郁と辺りを包む。朝早く湖畔を散歩する人々は何となく腕を伸したり、開いたり、深々と深呼吸をしたり。夜になれば、湖畔を色とりどりの街灯が瞬き、湖水に逆さの光を映しだす。また市区の東南郊外、閩江の北岸に石鼓に似た形の鼓山が雄偉な姿を見せる。朱徳の詩の一節に

「鼓山高聳閩江頭、面貌威嚴障福州」

とある。これは、鼓山の雄姿を彼らしい率直さで表しているもの、と言える。その山上の涌泉寺は、朱の柱、碧の甍を緑の萌え立つ山や谷に浮き立たせる。朱熹が学を教えた水雲亭と摩崖の石洞が人を惹きつけ、観光客はこ



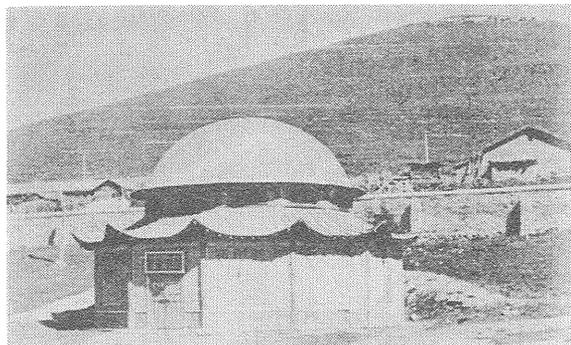
第35図 福州温泉の温泉位置図

の山一帯に足を運ぶとのことである。

林海の深奥くに阿爾山温泉

大興安嶺の中ほど、その西麓に辺境の町-阿爾山（内蒙古自治区）がある。この町は非常に広大な森林の奥深い所にあるとはいえ、賑やかなところである。盛夏の頃になれば、その賑やかさが最高になる。草原の遊牧民たちがそれぞれ包（テント）や食料を積んだ馬を駆って、或いは馬車に乗って引きも切らずこの地に集り、温泉の周辺に設営して温泉に入り、保養する。

阿爾山は山の名前を借りて地名としたのではなく、そのフルネームは哈倫阿爾山、すなわちモンゴル語の“熱いお水”の意味なのである。この地方の遊牧民が阿爾山の温泉に入るようになってから、もう100余年の歴史が刻まれている。言伝によると、清朝の頃、阿爾山近くの草原を辿る一人の蒙古族の王子があった。或る日、王子は鹿の肉が食べたくなくて、鹿を射ち取るために従者を山にやった。従者は一頭の鹿を見つけて矢を射た。矢は見事に当たったが、急所を外れて脚に刺さった。鹿は命からがら逃げ、従者はその跡を追って山にわけ入り、山合いの緑の盆地に出たが、傷ついた鹿は叢に逃れて見えな



第36図 阿爾山の有名な温泉一五隣泉

なくなりました。従者は東を探し、西を見張り、鹿が潜む辺りにそっと近づきかけたその時、突然叢から鹿が跳び出て、まるで飛ぶかのような早さで森に逃げ去った。何と、その鹿の何処にも傷を受けた跡はないように見えた。従者は驚いて鹿が跳び出したところに走り寄り、そこに熱気に溢れた温泉が湧いているのに気付いた。王子は従者が空手で帰ってきたことを怒り、鞭で撲りつけ、従者の腿をひどく傷つけてしまった。従者は逃れて、あの温泉まで這った。そして温泉に浸かった。それから数日、傷はすっかりよくなった。それを知った人々は、この温泉を“神の水”と考えるようになり、毎年の真夏にこの地にやってきて、露天風呂を使うようになった。日本がこの地を占領していた時代には鉄道が敷かれ、“大和旅館”が建てられて、限られた人々の歓楽の地になっていた。

中華人民共和国は阿爾山温泉の開発と利用をさらに進め、病院・保養所を建設し、泉温のさまざまな浴湯・療養施設を作った。今では、この地は規模のかかなり大きい保養地になっている。温泉療養事業が広がるにしたがって、商店・郵便局・電話局・銀行・総合病院・旅館・映画館などが新たに建てられ、赤煉瓦・青瓦の建物が並び、緑の丘にコントラストして幽境の中に静まっている。

阿爾山は発展して、すでに人口1万人の町であり、中国の有名温泉療養地の一つに成長している。

阿爾山温泉は、四面を山々に囲まれた小さな盆地に位置していて、延長500m、幅50mの温泉湧出帯を形作り、湧出孔は合計48で、串団子のように配列している。奇妙なことに、湧出孔がこれほど密集しているというのに、それぞれ泉温は違っている。泉温の最高は48℃、最低はわずかに8℃、一般的には30℃前後である。たとえば、湧出孔がただの0.5mしか離れていないのに泉温の差が4-5℃もあり、1m隔たっているもので10℃前後もあると言う、中国では珍しい温泉区である。

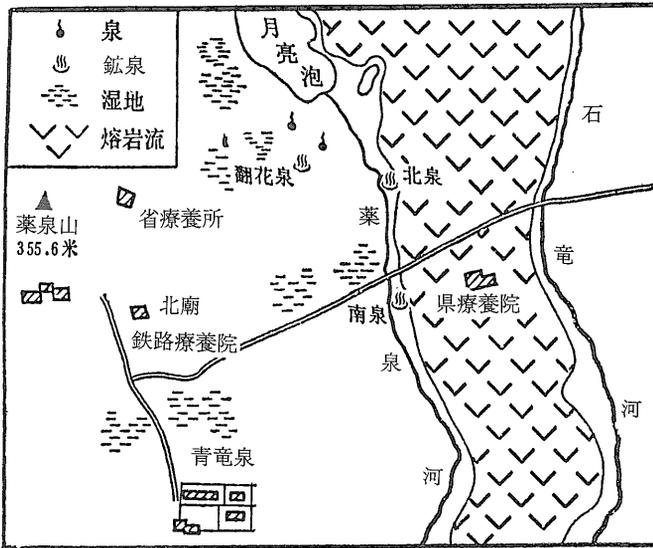
この狭い温泉区にどうして多くの泉源が密集しているのか、誰しも怪訝に思うだろう。しかし、怪しむには足りない、中国の地質専門家はこれについて次のように説明する。中生代に大興安嶺地向斜区が燕山運動の強い影響を受け、火山活動がきわめて頻繁になり、その活動の中で今日の阿爾山温泉が古期火口に誕生し、地下にまだ大量の地熱エネルギーが包蔵されていて、ボイラーのような働きをしていると。この温泉地はまた一つの向斜盆地で、四周の雨水が岩層の割れ目に沿って火口の周囲の透水層中に集中し、一つの巨大な貯水構造を形作り、その地下水が地熱に熱せられて熱水になると。そして同時に、構造運動の影響を受けて貯水層の上位の岩層が褶曲し、破碎され、その破碎が熱水の地表への通路を開き層圧に押されて上早・溢流するのであるが、破碎による通路の深度(長さ)が褶曲形態の細かさと複雑さも関連してさまざまなものとなり、そのために泉温が違っているのだと。

この温泉水は、過マンガン酸カリ、カルシウム、マグネシウム、硫酸根イオン、硝酸根イオン、放射性アルゴンなどを含有しているが、無色・無臭、透明で、弱アルカリ性であり、飲むことも入浴することもできる。入浴すれば各種の皮膚病とリュウマチ性関節炎、ノイローゼ、外傷性腰痛・腿痛に効き、飲用すれば爽やかな甘さがあり、胃病を治し、胃腸を強くする効果がある。それで、この地の人々は“飲まなきゃ後で後悔する”と口癖のように語る。

阿爾山温泉は広大な草原の遊牧の民を誘うだけでなく、他の省や市の病弱な人々もこの温泉にやってくる。5月から10月までが1年のうちで療養の黄金の季節である。この時期、気候が快適で、花が咲き、風が爽やかで、風景も一段と美しく、療養や休養の効果がとくに上がるからである。

五大連池の薬泉山

森林に覆われた小興安嶺の南麓、黒竜江省の訥漠爾河の北側に14の玄武岩の岩砕丘があって、一つの火山群を形作っているが、いずれも死火山である。その中でもっとも小さい岩砕丘が薬泉山である。この薬泉山の火口は直径が230m、深さが32mで、底は平坦であり、緑の草が生え、火口壁の上や斜面にはまるで地下の森林のように木が育っている。この薬泉山の上から下を見下ろすと、一つ一つの鉱泉が日の光を受けて真珠のように連なって光っている。その中では、南飲泉、北飲泉、翻花泉、南洗泉、北洗泉の5ヶ所がもっとも有名である。これらの泉は鉄質炭酸塩・重炭酸塩鉄泉に属し、大量の炭



第37図 薬泉山温泉の鉱泉分布図

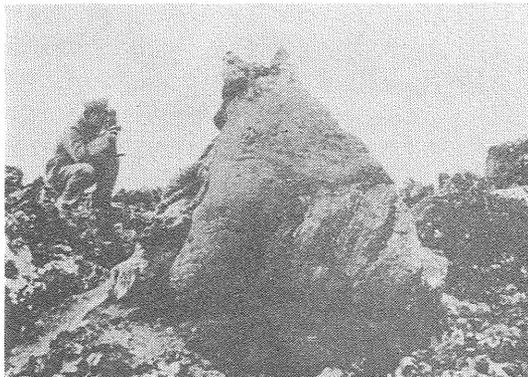
酸ガス及び硫黄・マグネシウム・ラジウム・チタンなどの元素を含有し、医療効果が非常に高い。それで、これらの鉱泉を人々は薬泉であるとし、薬泉山の名もそれに由来している。

薬泉山鉱泉は一般に石龍溶岩台地の縁辺、もしくはその近くの、沼沢化した凹地に湧出している。現在もっとも利用度の高い幾つかの鉱泉は、いずれも薬泉山東側の薬泉河畔にあって、泉源が川岸に接しているため、雨季に増水する時は河水の侵入を受ける。そして冬と春の湯水期は河の水位が下がって各種含有イオンの濃度が増し、湯治にもっともよい季節になる。南飲泉と北飲泉は両方とも鉄質重碳酸塩鉱泉で、年平均の泉温3-5℃は、飲めば清冽で甘味があり、氷を浮かべたソーダ水に似た感じである。この鉱泉を常に飲んでいれば、消化を助け、止痛・鎮静・安眠・利尿などの効果があり、中でも消化系の病人が長くこの鉱泉を飲み続けると、卓効があ

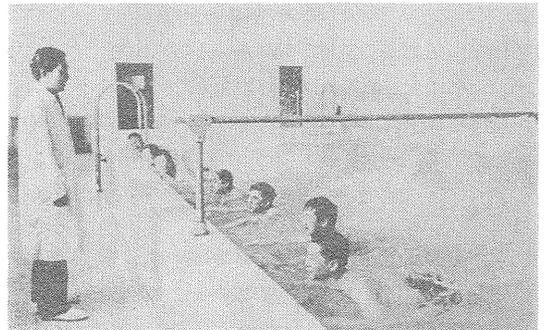
ると言う。それで、胃潰瘍の治癒例が多く語られている。

北飲泉の北側に沼沢低地が続き、翻花泉がそこにある。その鉱泉中の大量の炭酸ガスが絶えず逸出して水面を泡だて、泉水が花のように開いては散る姿は人を飽きさせない。この様子から翻花泉の名が生れたわけである。この鉱泉水は濁っていて飲めないが、入浴による治療効果は高く、疥癬などの皮膚病には著効があるとのことである。この翻花泉周辺の泥も禿によく効き、禿頭病の人が翻花泉で頭を洗い、或いは泥を帽子のように頭に載せ、それを繰返していくと、黒い頭髪が伸びてくるのか。とにかく湯治のシーズンには、なかなかの盛況というから、その様子を想像すると、つい口許がほころびてくる。

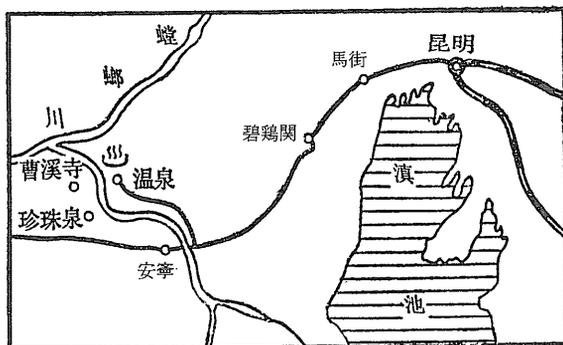
以上のほか、薬泉山の東南の隅に二龍眼淡水泉があり、泉水は澄んでいて、底がよく見え、無色・無臭であ



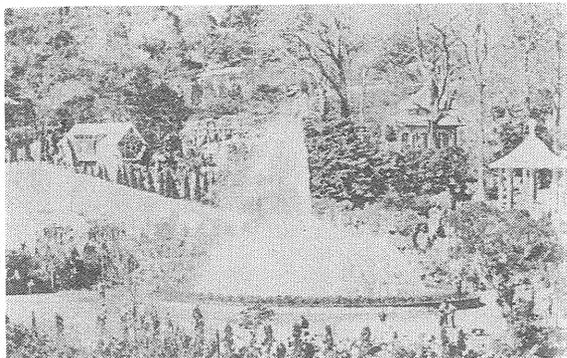
第38図 五大連池火山の風光 - うづくまる“石の熊”



第39図 小湯山温泉療養所の関節炎患者が温泉浴療法を受けている



第40図 安寧温泉の位置図



第41図 台湾省の有名な風致区 - 陽明山公園

る。この泉水は眼病に効き、これで眼を洗えば両目すっきりということ、洗眼泉の別名が付いている。

さらに、火焼山の東南麓の沼沢地で最近一つの鉱泉が発見され、科研泉という名が付けられた。これは温泉が11℃、黄土色をしていて、飲むと突刺すような辛さがあり、泉底から絶えず大量のガスが沸騰しているかのように湧き出ている。今のところ、鉱泉治療など利用効果が研究中で、利用は結果が出てからのこととされている。

薬泉山地区は以上のように鉱泉の豊富なところであるが、その開発と利用の歴史はまだ短い。この地は、100年ほど前には人煙絶えた広大な森林と草原で、鹿や兎などの獣が群れる地にすぎなかった。言伝えによると、南鉱泉はダフル族の猟師によって発見された。その後、ダフル族・オロチョン族・モンゴル族の遊牧民たちが毎年端午節に100kmの道のりであろうともそれを厭わず、鉱泉を飲んで病を治すために、馬車に揺られて山を越え、川を渉り、この鉱泉の水を“神水”として崇めて、飲む前に豚を殺して神に捧げたという。

しかし、この薬泉山地区の鉱泉の利用についての研究が本格化したのは、中華人民共和国の建国後のことである。そして、1973年にはわずか4ヶ所にすぎなかった療養所が、今では78ヶ所になり、五大連池鉱泉治療研究所もある。毎年、春・夏の療養の盛んな時期には療養所、ホテル、旅館がすべて満員になるだけでなく、住民の家に部屋を借りて療養に励む人も少なくない。

そのほか、ミネラルウォーター工場が建設されて“連池印”鉱泉水が生産され、年産量は数10万壺に及び、生粋の鉱泉水であるから水質が芳醇で、東南アジア諸国に輸出されている。

そして、かつての無人の地は、現在、繁栄する薬泉鎮の町に発展し、中国では著名な鉱泉保養地になっている。

薬泉山の地区は、蘇州や杭州の森林庭園の美しさもなく、漓江の山水の風景もないが、自然が生み出した別世界の眺め、火山の風光を備えている。至る所に火山爆発の跡を留め、たとえば14の玄武岩の丘は火山が爆発した時にできた“火山円錐丘”。それがまるで基石のように縦横に連なり、4組に分れて長方形の台地上に並ぶ。その火山円錐丘の間には溶岩に閉じられた大小五つの湖沼があって、台地に嵌め込まれた五つの明るい鏡のように、宝石のように目を楽しませる。これが“五大連池”である。

薬泉山の背後に、老黒山・火焼山の二つの火山円錐丘がある。この二つの山は14の火山円錐丘の中でもっとも新しく、老黒山は黒い岩石で構成され、海拔は515.5mで、もっとも高い。この山に登ると、展望は素晴らしく、或いは水を湛え、或いは樹木に満たされた、一つ一つの火口が見渡せる。樹木に満たされた旧火口は“火口森林の奇景”と表現されている。

五大連池火山群は中国での火山の研究に好適なフィールドになっているだけでなく、一つの異彩を放つ火山公園ともなり、人々に風情の尽きない火山の四季を見せてくれるのである。すでに、地質写真集<五大連池>が出版されて久しく、地質調査所の図書室に所蔵されている。一見をお勧めして、このシリーズを終る。

(編者注：このシリーズの(1)と(2)は、岸本文男氏が地質調査所在職中、「地質相談所」の名前で公表)

<受付：1989年3月30日>